

(二) 創立七十年記念行事

東京音楽学校の創立七十年を祝う行事が昭和二十三年十月に行われた。同月二十六～二十八日の演奏会については本百年史『演奏会篇第二卷』七八八～七九五頁に掲載されているとおりである。

東京芸術大学は東京音楽学校設立の明治二十年から起算して昭和五十二年を九十周年、六十二年を百周年としているが、五十周年から八十年までは音楽取調掛設置の明治十二年から起算されて記念行事などが行なわれていた。この数え方に従えば昭和二十四年十月が七十周年にあたるが、二十四年春には東京美術学校とともに芸術大学となることが決定したため、一年繰り上げて音楽学校だけで行うこととしたものである。

記念行事全体は十月二十五日から三十一日までにわたり、演奏会のほか、記念式典、音楽教育研究大会、同声会器楽講習会、展示会などが行われた。

ここでは創立七十年記念行事に関する綴りより、『演奏会篇第一卷』既出のプログラムを除き、式典記録と会計報告と印刷物の一部、それに戦後復刊された『同聲會報』中の関連記事を掲載する。

式典當日の雑記事

潔氏以下十名の二十年以上勤続者に感謝状と記念品目録（小管）が授與された。こゝで一應式を閉ぢ暫時休憩の後洋樂と邦樂の演奏が行はれた。午後二時から帝劇で行はれる演奏の練習を行つたが聴衆場外に溢れるほどだった。

一、設備など 正面玄關左手（會議室の下）に天幕を張つて來賓受附、卒業生受附を設け、來賓受附では招待狀と引換えに記念品（菓子）とプロ、行事日程表、沿革略史を渡し、卒業生受附では姓名を記帳、胸に名札を吊るさせ、プロなどを配布した。

校長室と會議室は主な來賓の控室とし、一〇四室と一一九室を一般來賓の控室とし、前者にはコーヒー、カステラ、ピースを後者には綠茶とビスケットを用意した。五一室は卒業生控室とし、があまり利用されなかつた。

四八室は職員、生徒の記念菓子引換所にした。

二〇室は七〇年史展覽會場となつた。その外適當な室が出演者の控室に充てられた。

式場の様子は次の通りであつた。

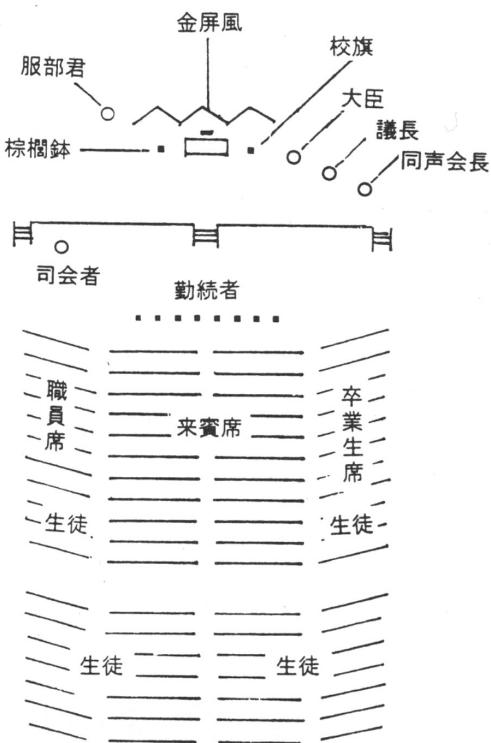
二、接待 主な來賓の接待は先づ受付の掛員が控室へ案内し、勤続者や先輩教官の二、三の方々に接待して頂いた。一般的の來賓は教官方に接待をお願ひした。

三、服裝など 職員は男子は大體モーニングで使ひふるしの小型の菊の造花を胸につけた。校長と祝辭を讀む來賓は大型のものを

帝劇における演奏

十月二十六日（火）午前十一時から邦樂の演奏が行はれたが高松宮同妃兩殿下がお見えになった。

十月二十七日（水）午後三時から洋樂の演奏があつて孝宮、順宮、清宮の三内親王様が御來臨になつた。



胸につけて頂いた。時代色を反映してかへりにはこの造花を返して貰ひ保存してある。

四、校長 十月四日に左腕骨折の負傷をされ淀橋の東京医科大学病院に入院、手術をされて漸く二十三日に退院された許りの校長を式典にお迎へできたのは一同の此上ない喜びであつた。この朝九時に大柳會計課長矢口君が自動車でお宅へお迎へに行つた。御子息も附添つて來られた。

絞羽織袴のお姿であった。醫師の指示で脳貧血を起されないために時々ブドー酒を呑まれた。式場でも一ぺん呑まれた。介添へとして壇上の蔭に服部君が控えていた。病後初の登校に拘らず二十分にも及ぶ式辭を述べられ滞りなく式を了へたことは喜びに堪えない。

支 出	收 入	
	二二、三一八二二	一一、二〇〇〇〇
△ △ △ △ △ △	一六、二〇〇〇〇	職員積立金
九五〇〇〇〇〇〇	三四、〇〇〇〇〇	七月分より十月分まで
一〇六、二〇〇〇〇	四五〇〇〇〇〇	寄附金
一一、〇〇〇〇〇〇	一、〇〇〇〇〇〇〇	職員一人一五〇圓
一一三一八八〇〇〇	一一〇〇〇〇〇〇〇	生徒本科、師範科
互親會	麻生フク氏	三四〇人
招待狀	研究科	一人一〇〇圓
記念式次第	寄附	三人
行事日程表	寄附	一人一五〇圓
三十年略沿革史一、五〇〇リ		
展覽會設備材料		
永年勤続者感謝状揮毫料		
一〇枚	印刷費九、七〇〇圓	

△ 六〇〇〇〇——來賓接待用綠茶
三〇〇匁

三〇〇勿

昭和二十三年十月十一日

東京音樂學校長 小宮 豊 隆

〔葉書〕

追て御來臨の節は此の状を掛員に御渡し下さい

以下は当日配布された印刷物である。

來賓職員生徒等關係者へ配布の記念品代價一百〇〇個代價

差引不足額

一、六五〇・〇〇は學校より支辨（△印）

外に通信費一、〇〇〇・〇〇は
リ
リ

〔手書き〕

〔案内状〕

拜啓 時下愈々御清祥の段賀上ます 初て本年は本校創立七十年に當りますので來る十月二十五日（月曜日）午前九時より左記次第に依り記念式を舉行致しますから御操作せ御參列下さる様案内申上ま

記

- 一、學校長式辭
二、來賓式辭
三、本校永年勤績者表彰
四、記念演奏（洋樂・邦樂）

なお樂器等の陳列會が本校で開かれますから御高覽下さい

昭和二十三年十月二十五日（月曜日）午前九時開始

創立七十年記念式次第

東京音樂學校

—(休憩)—

合唱 東京音樂學校生徒

四、能樂（舞囃子）
(邦樂)

世阿彌作

高砂シテ 嶋澤俊一 大鼓 安福春雄 太鼓 金春惣一
小鼓 三須錦吾 笛 藤田大五郎

地謡 鄭郭太郎
リ 藤波順三郎

四、能樂（舞囃子）
(邦樂)

五、箏曲

菊末檢校作

嵯峨の秋 箏替手中能島欣一 箏本手 東條夏子
観阿彌作大鼓 安福春雄 太鼓 金春惣一

六、能樂（舞囃子）
(邦樂)

草紙流小町 シテ 寶生九郎 小鼓 三須錦吾 笛 藤田大五郎
地謡 前田忠茂
リ リ 寶生英雄
リ リ 波吉信和

七、箏曲（古曲）

宮城道雄手附
尾上の松 筝 宮城道雄
三絃 牧瀬喜代子
江場さと子

II ポスト パスカ

作品三九 第一番 メンデルスゾーン作
第一樂章 アレグロ ヴィヴアーチエ エ コン ブリオ

二、モテツト（オルガン伴奏付き、女聲合唱の爲の）
管絃樂編曲 池内友次郎
独唱 ソプラノ リ 浅野千鶴子
アルト 横田ふみ子
リ 岡部多喜子

三、幻想曲（ピアノ、合唱及び管絃樂の爲の）
作品八〇 ベートーヴエン作

ピアノ獨奏 田村宏
指揮 金子登 渡邊暁雄

管絃樂 東京音樂學校管絃樂部

八、長唄

九世杵屋六左衛門作

越後獅子 嘴杵家安彦 三味線 山田抄太郎

リ 石村義一 リ 杉本茂一
溝落久太郎 リ 鈴木利治

(十二時半終了)

昭和二十三年十月二十五日

創立七十年記念

東京音樂學校略沿革史

一、名稱の變遷 二、建物と敷地 三、制度の變革 四、附屬機關

五、演奏會

一、名稱の變遷（附音樂取調掛の事業）
音樂取調掛→音樂取調所→音樂取調掛→東京音樂學校
校→東京師範學校附屬音樂學校→東京音樂學校
本校は明治十二年十月文部省内外に設けられた「音樂取調掛」から始まる。これは米國で音樂教育を研究して歸朝した當時の東京師範學校長伊澤修二氏の盡力で設けられたもので、彼は此の御用掛に兼任せられた。翌十三年三月には、伊澤氏が滯米中師事した米國人の音樂教育家ルーサー・ホワイトイング・メーリン（Luther Whiting Mason）氏が招かれて、伊澤氏に協力することになった。

音樂取調掛の目的は、小學校の普通學科の一に唱歌を課すための一切の準備をなすことであつた。その方法として、次の三事業がなされた。即ち(1)内外音樂の比較調査(2)この調査によつて兩者を巧みに折衷調和させた適當な唱歌の新作(3)將來此の新たなる音樂教育にたづさわる可き人物（音樂傳習生）の養成。而してこの最初の傳習生は三十人募集されたが、合格者は二十二人（男九人、女十三人）であつた。この「音樂取調掛」は明治十八年二月「音樂取調所」と改稱されたが、同年十二月再び「音樂取調掛」に改められ、二十年十月「東京音樂學校」と呼ばれるに至つた。

然し二十六年九月よりは高等師範學校に附屬せしめられて、高等師範學校附屬音樂學校と改稱されたが、六年後の三十二年四月に至り、再び獨立して「東京音樂學校」の名に歸り現在に及んでいる。

二、建物と敷地

「上野」と言う名前で廣く民衆に親しまれて來た本校七十年の足跡こそは、そのままわが國音樂文化進展の記録でもあるから、本校の過去の歴史を振り返ることは、わが國音樂愛好者の共通の關心事であると信ずる。よつて今本校七十年の變遷の跡を、便宜各項目に分けて略述して、過去を知り未來を祝するよすがと致し度い。

音樂取調掛の建物は現在の東京大學の構内（當時の文部省の敷地）にあつた。それが明治十八年七月上野公園内（今の科學博物館

附近)に移轉して増築され(取調所時代)、更に二十三年西四軒寺跡の文部省用地即ち現在の場所に移轉したわけである。

而して最初の音樂取調掛の建物は、本郷文部省用地内の第十六番館(舊教師館)と呼ばれた階下二室、階上二室の小さな木造二階建であつた。後、それに奏樂堂一室(二十坪)、教室三室(六坪)、習樂場六室(三坪)が増築され、その中にピアノ十三台が備へられたのであるが、之を現在の本校建坪九一九坪、延坪一、五三八坪、備附ピアノ數一六八臺と比較すれば誠に隔世の感がある。

一方此の所謂「本校」の外に、明治三十一年五月神田の一橋、高等師範學校附屬地に分教場が設けられ、選科の一部及び小學唱歌講習科を之に移した。之が分教場の始まりであるが、昭和三年十月神田駿河臺の新築校舎に移轉した。現在の分教場の建物は即ち之である。

三、制度の變革

音樂取調掛と云う研究機關から東京音樂學校と云う教育機關に變つてからは、當局の方針と時勢の要求から度々その教育制度特に科部組織の變革が行われた。

科部組織の創設されたのは明治二十二年で、豫科と本科に二大別され、本科は更に師範部と專修部に二分された。以後の變革を年表風に示せば、

明治二十七年六月 新に小學唱歌講習科を設け、その教授には本科最終學年の生徒が當つた。

同 三十三年 従來の豫科本科の二科制度から、豫科、本科、研究科、師範科、選科の五科制度に改められ、本科は更に聲樂部、器

樂部、樂歌部に分れ、師範科は甲種、乙種に分れた。

同 四十二年四月 新に聽講科が増設され、六科制度となつた。尙本科の學年制を廢してその修業年限を三ヶ年以上五ヶ年以内とし、本科及び研究科の學科目を主、副、兼の三種に分け、更に本科の樂歌部及び研究科の作歌部を廢し、豫科の修業年限を二ヶ年に延長する等の大改革を行つた。

同 四十四年一月 豫科の修業年限二ヶ年を一ヶ年乃至二ヶ年に改めた。

昭和七年四月 本科に作曲部を新設し、選科の學科目にも作曲を加えた。

同 十一年六月 新に邦樂科を設置。

同 十七年四月 甲種師範科三年を四年に延長。

同 十九年四月 本科、甲種師範科、邦樂科の三學科を本科、師範科の二學科に改め、邦樂科を本科の中に編入し、入學資格を中等學校三年終了程度とする。

之が今日まで存續している現行の制度である。

四、附屬機關

上野の本校と神田の分教場に於て行われて來た音樂教育の外にも、種々の施設と事業が存在した。その主なるものは明治四十年十月に發足した唱歌編纂掛及び邦樂調查掛、翌四十一年一月に定められた樂語調查掛、大正十一年四月に設けられた第四臨時教員養成所、同年十二月に制定された管絃樂部、昭和八年六月に新設された上野兒童音樂學園、同年九月に設置された上野男兒合唱團であるが、その中で特に邦樂調査の事業については一言しなければなら

ぬ。

邦樂調査掛は明治四十年に制定されて以來幾度かその官制と掛員の變更はあつたが、その間に雅樂、能樂、箏曲、長唄、常磐津、清元、一中等々の邦樂の五線譜による採譜と、近世邦樂年表として、常磐津、富本、清元の部（明治四十五年）、江戸長唄（附）大薩摩の部（大正三年）、義太夫の部（昭和二年）等の出版、箏曲集の第二編及び舊第一編の改正版の出版（大正三年）などは誠に價値ある業績ではあるが、前記の五線譜の膨大なる原稿が現在も尙書庫の中に所謂寶の持ち腐れとして埋蔵されることは惜しみても餘りある次第である。

五、演奏會の今昔

音樂取調所の最初の成績發表演奏會は明治十五年一月三十日と三十一日の兩日に行われた。

當時の情況は、「音樂取調掛成績申報書」によれば、「メーリン教師唱歌並音樂進歩ノ情況ヲ報告ス。終ツテ東京師範學校附屬小學校生徒、唱歌掛圖第一曲及單音唱歌七種ヲ演ス。右退出シテ音樂取調掛傳習人洋琴六曲ヲ奏ス。（曲名不詳）。後東京女子師範學校生徒、音樂取調助教員及傳習人合併ニテ單音唱歌三種、複音唱歌一種、高等單音唱歌二種ヲ演ス、休憩後本邦俗樂ヲ奏ス。」とある。

之を本年三月の卒業演奏と比較すれば、うたゝ今昔の感にたえない。

次に本校演奏史上の主なるものを擧げて見ると、

明治三十一年十月 授業の成績を公表するため音樂演奏會舉行の事を定める。

大正九年一月 初めて地方に出張演奏をなす。

昭和四年七月 従來は東京に於ては校内演奏のみであつたものを初めて校外公開演奏をする。

同 六年二月 毎年二回の演奏會を三回に改める。
同 六年十一月 従來臨時に開催した邦樂演奏會を毎年一回開催のことに定める。

同 九年十月 獨逸向け音樂放送。

同 十年十二月 英國向け音樂放送。

同 十一年一月 初めて邦樂の地方出張演奏。

同 十一年十月 初めて九州地方に出張演奏。

同十二年一月 初めて對米放送。

同十四年十一月 初めて四國地方へ演奏旅行。

同十五年九月 北海道及び東北地方に紀元二千六百年奉祝洋樂出張演奏。

同十七年八月 滿洲に出張演奏。

（昭和二十三年十月「創立七十年記念祭音樂教育創始七十年記念記録」）

創立七十周年記念日は昭和廿四年十月四日に當るが、本校の大學生格が、明廿四年度實現と共に、よびなれて來た我が東京音樂學校の名稱もなくなるので、其祝賀式及紀念行事を七十年目の此秋に繰上げて、實施することに三月十八日の教授會で決議確定した。

創立七十年記念式
——本年秋に繰上げて舉行——

創立七十周年記念日は昭和廿四年十月四日に當るが、本校の大學生格が、明廿四年度實現と共に、よびなれて來た我が東京音樂學校の名稱もなくなるので、其祝賀式及紀念行事を七十年目の此秋に繰上げて、實施することに三月十八日の教授會で決議確定した。

東京音樂學校七十年

片山 頴太郎

東京音樂學校は明治十二年（一八七九年）文部省に音樂取調掛の官制ができたときに胎生したので、今日では六十九年の経験をもつてゐる學校は施設こそ官の經營ではあるが、その創設を促した伊澤修二の人格や理想とは切りはなし得ない、いのちを擔つてゐる。ペリーが日本の戸をたゝいた嘉永六年に伊澤さんは信州の山深いところで三歳のわらべであつた。維新の大きな旋回はこの少年を風雲兒に育てあげた。「蝶々蝶々菜の葉にとまれ」とある清元の唄詞は西洋旋律で學校唱歌の第一聲となつて愛知師範學校の庭から響きそめた。意義深いこの試もそこそこに氏は官命でマサチューセッツ州の師範學校に留学。またハーバート大學の理科にも學び、電話を始めたグラハム・ベルとも親しかつたといふ。とりわけ音樂教育に譽高いメーソン氏に心を通はせ、やがてこの哲人を我國に迎へて顧問とされたことは日本の音樂こと始めにはこの上ない仕合せであつた。唱歌の編集、掛圖の作製、傳習生の教育それに成績披露の音樂會。このあわただしい時務の中に先生の理想と學術的思索とは「音樂取調成績申報要略」一卷に壓縮された。音樂學校の七十年を一ことに云へばこの要略一本の實踐展開であつた。

さて、音樂取調所は東京音樂學校となり（明治二十年）校舎もできた。しかし伊澤校長は二十四年に學校を退かれた。ねらひ放たれた矢の路は一すじにゆく。時には高等師範の附屬となつたが如く路に悩むこともなくはなかつた。だが向上線を踊る國のあゆみにはげ

まされ、また美しき技への學徒の熱意は漸次洋樂の技法と精神に近づき得るようになつた。大せいの外人教師の倦むことのない勵ましには感謝せねばなるまい。幸田・安藤・橘・神戸・島崎・瀧の諸氏は明治期才名を謳はれた樂人であつた。また明治末に施設された邦樂調查掛が「近世邦樂年表」三卷を完成出版したことは學校の學術的研究として高く評價さるべきであらう。

事はじめ、メーソン・伊澤のアメリカ的音樂教育の方法と理念がその後次第にヨーロッパの流儀に従つて内容を深化したわけは十八世紀以降の世界音樂の莊嚴なる大潮流の意義を解するものには容易に肯うことができる。迎へる教師、送る留學の諸生の大方はスエズ經由でなくばシベリヤの鐵路を走る人々であつた。また哲人ピヤニストのケーベル博士（明治三一年——四二年まで在職）の形而上學的魅力も音樂美學的霊氣を滋くしたのである。

ユンケル氏は管絃樂を育て上げた。ペツオルド夫人は歌劇の歌謡を教へ、ネトケ先生はリードの妙を傳へた。ロイテル・ショルツ・コハンスキー・バルダス・シロタ・クロイツアの諸氏は近代ピヤノの技法をつぶさに紹介し、ウエルクマイステル氏は作曲とチエロの弟子をもち、クローン・ポラツク及びモギレフスキイの諸氏は學校にヴァイオリンの技法を授けた。學校は個人ら音樂的技能を策勵するためには惜むところなくその要望にまかせた。その結果大正より昭和に亘つて樂人・名手の輩出は全く空前の盛況といふべきであつた。しかし更に綜合的な音樂活劇として管絃樂と合唱の沒我的な協力こそは三代文化の意義深き焦點の一つを成就したものといへよう。

どうして五線譜を理會させようかと苦心された取調所時代の先覺には五十年の後マーラーの交響曲が次々に上演された状況を想像することは不可能であつたにちがひない。國民の音樂をつくる作曲が業は先人遺托の眼目であり、技藝はこれをまつて更に點睛の功をなさめる。作曲の研究試作は過去に必ずしも乏しくはなかつたが、今また新生國家を大らかに展望する情操をうつし唱へる音樂の興隆の焦眉頭燃の急であることをおもふと、ここには却つて我らに厳しい負ひ目があらうこと自覺しないわけにはいかない。

ユンケル氏に發足した管絃樂と合唱とはクローン・ラウトルー・プリングスハイム・シュヴィイガー・フェルマー・グルリツト諸氏の努力によつて成長の極大にまで達した。その曲目もパレストリーナのミサ曲の古いものからバッハ・モーツアルト・ベートーベンの古典作家の諸作、シューベルト（この度上演のミサ曲はラウトループ氏初演）からワグネル・ブラームス・ブルックナーに至るロマン派音樂、R・シュトラウス・ドビツシ・レーガー・マーラー・ストラヴィンスキーの現代音樂の諸作に至るまで、先づ洋樂の重だつ曲目を學んだのである。歌劇の試演は困難な事情の下に明治時代にはグルツクのオルフオイス、昭和にはクルト・ワイルのヤーザガ（謡曲「谷行」の翻案に基く學校歌劇）が企てられたことも回想される。

今回の事變戰亂の國家的不運は學校の動きにも不幸なひづみをもたらした。しかしこの間指揮者の養成が要望されてこの方面の新人も現れ、一時沈滯を餘儀なくされた管絃樂も陣容を改め、若人たちの編成で今日その新しい門出の日を迎へるに至つた。敗戦の苦味を

嘆して學校は今日あるべき盛況をよろこぶ時には未だ立ち直つてはゐない。しかし新に眞眼の校長を得。積弊の一面を正し、教授力の増進をはかつて新憲法の國家更生意慾に沿うて強く生れかはらうと努めてゐる。

學校は官の施設ではあるけれどもその内容は全く國民文化の指標である。この消息が最近一般によく理會^{ママ}されて來たことは我らには正に百萬人力である。學校の内のものはよくこの聲援に應じて々の困難を克服しようと専念してゐる。

〔同聲會報〕第二六六号 昭和二十三年四月 三～四頁

急 告

今年十月四日は本校七十年目創立記念日に當り來學年度は美校と合同の藝術大學として新發足する豫定であつて、東京音樂學校といふ名稱とも別れる事であり、今年は本邦音樂教育事始め七十年とも考えられるから此際を期して大に祝いたいという校外有力者からの申入れがあり新聞社各音樂團體の贊助も得ましたので、十月廿五日から一週間を「音樂教育創始七十年記念大音樂祭」の期間とし左記日程の様な各種の催を行う事になりました。就て本校卒業生諸君はもとより音樂關係者諸君の御支援御協力を得て其の期間を大に意義あらしめたいと思います。奮つて御參加を乞う。

昭和二十三年八月

主催 東京音樂學校
東京音樂學校同聲會

東京音樂學校七十年記念祝賀行事

十月二十五日(月) 七十年祝賀記念式

リ 二十六日(火) 邦樂演奏會(會場帝劇) 展覽會(未定)

リ 二十七日(水) 帝劇演奏會(廿六日より三日間)

リ 二十八日(木)

音樂教育研究大會
(同聲會總集會)

東京音樂學校合唱團及管絃樂團
日本交響樂團、東寶交響樂團、
東京ファイルハーモニー其他の演

奏會

日本交響樂團、東寶交響樂團、
東京ファイルハーモニー其他の演

奏會

リ 二十九日(金)
リ 三十日(土)

器樂指導の講習

行事あり

日比谷新音樂堂の(期日十月三
十日) 一萬人の合唱其他種々の

リ 三十一日(日) 學友會祝賀會
(同聲會報) 第二六七号 昭和二十三年九月 卷頭

創立七十年記念

本校の前身である音樂取調所が明治十二年十月文部省内に置かれてから、來年が七十周年に當るが、明春東京美術學校と合併して新制大學に切替わる豫定なので、所謂押出し式で現在第一學年の生徒は、昭和二十七年三月まで在校し、それまでは現行制度の學校も存置されるわけであるが、獨立校として本校は、幾多の輝かしい業績や思ひ出を殘して、本年度で終止符が打たれることになるので、三十年目に當る今秋を期して創立七十年記念祭を舉行してはとの議が起り教授會で決定を見た。

また我國音樂教育の歩んだ七十年でもあるので、これを記念して同聲會、朝日新聞社の共同主催で廣く樂壇、音樂教育會に呼び掛けて行はれる音樂教育創始七十年記念音樂祭(假稱)へも合流することになつて本校の記念祭は、こゝに社會的なひろがりを持つに至り、多彩なプログラムが繰り廣げられることになつた。華かな本校のフイナーレであり、新制大學へのプレリユードでもある。このため上述の行事のほか、本校、日響、東寶出演の演奏會、獨唱、合唱等の音樂會、一萬人の合唱會、全國的規模の表彰式等が加わる豫定である。

又この機會に同聲會で音樂教育研究會の開催を企て、多數諸兄の御來會を得て、この盛儀を共に祝うことのできるのは、限りなく喜ばしいことである。しかしこういう催しには卒業生諸兄の御協力が是非必要なので、精神的、經濟的に絶大な御後援を賜わつて、この記念祭を最も意義あるものに致したいと念願して已みません。

をわりに本校の現況を附記します。

校地 七、四九〇坪 建物延 一、七八四坪 ピアノ 一六六臺
生徒 九九三人 職員 一六七人 小宮現校長は十七代目
卒業生 三、〇一三人 豫算 五百萬圓 (町田事務官)

(同聲會報) 第二六七号 昭和二十三年九月 一七頁～一八頁

東京音樂學校創立七十年記念祝賀式典

十月廿五日(日) 午前九時 於奏樂堂

早速記念祭委員會が作られ、同聲會からも參加を得て協議の結果、今本校單獨主催で豫定されている行事は、式典、記念演奏會、教職員表彰、樂器等の陳列會などであるが、本校が歩んだ七十年は

昭和廿三年十月廿五日上野の森の秋晴れ美しい朝、我が東京音樂學校創立七十年記念の祝賀式典は森戸文部大臣代理日高學校教育局

長をはじめ、多數の來賓各府縣から參集の卒業生、生徒父兄、職員生徒参列の下にいとも厳かに舉行された。

小宮學校長は負傷の左腕にギブスを付けた儘病苦押して出席され相當長時間に亘つて感銘深き式辭を述べ、來賓文部大臣代理日高學校教育局長が別項大臣の祝辭を代述せられ、松平參議院議長の祝辭（別項）あり、次に本會々長小松耕輔君が祝辭を述べられた。

次いで學校長から母校永年勤續者に表彰狀と記念品の授與があつて式を終り、十分間休憩の後記念演奏を行つた。〔以下略〕

（『同聲會報』第二六八号 昭和二十四年二月 四頁）

七十年記念祭を終つて

長谷川良夫

七十周年記念祭も先ずまず大過なく進行し、全國から多數の同聲會員をも迎えて豫想した以上に盛大に終ることができたのは、御同慶の至りだが、かえり見ると心残りが無いでもない。

物故職員の慰靈祭が見合わせになつたこともその一つであつた。我々が人情をわきまえなかつたわけでは決してなく、全く止むを得ない事情からそうなつたのである。

故人のうちでもう一年生きてくれたら、と惜しまれるのは守衛の花木老であつた。

花木のおぢさんは私が入學したころ、既に在職六年だか七年だかの一應の古參者であつた。それが、御承知どおりの言うに言われぬ忍苦の十數年を専心學校の爲に盡し、戰後も神崎老と組んで相變らず誠實な勤めぶりを見せ、全校から親しまれていたのだが、實に惜

しいことに去年の十一月に急逝してしまつたのである。もう一年生きていてくれたならば十月二十五日のあの劇的な永年勤續者表彰式に出で貰えるところだつたのだ。

花木老は二十數年つとめて現職のうちになくなつたのだから、本會員の過半數は朝な夕な校門の出入りにぢろりとやられて來たわけである。わけても寄宿舎に「住み込んで」おられた諸君のうちには「ぢろり」ではなく時には「ちくり」とやられた人もあつたようだが、その方々にとつてはひとしお忘れがたい存在であつたろうと思う。

花木老は若い時分に道樂のひとつおりは盡したと言うだけであつて、酔いも甘いもかみ分けた苦勞人であり物の道理をわきまえ、肝も据わつたいゝおぢさんであつた。特に愛惜を感じさせるのは、この點は今の神崎老も同様だが、まごころの貴さをよく知つていたことである。こう言う人間的な、誠實な氣風はうちの學校の事務關係の方々の間に今も生きている傳統的なもので、これが學校にとつて無形の大きな力となつてゐるのを見ることは嬉しく有りがたいことである。

★

會員との長いおなじみと言う點では花木老に劣らない庶務課の高橋氏も二三年前に故人となつた。高橋さんで判らなければ「あの字の上手な人だ」と言えばなづく人が多いだろう。

この學校が創立以來七十年、ともかくも今日このとおりに在ることを得たのは、伊澤初代校長を始め、直接間接に學校の爲に盡されたのは、伊澤初代校長を始め、直接間接に學校の爲に盡され

た多數の方々の力によるものであることを、我々は忘れてはならぬ
いが、元教授で最近二十年程の間に故人となられた方として、島
崎、乙骨兩先生が思い出される。

島崎先生には直接のお教えを受けなかつたので、先生の人と大きな功績とについては別に適當な語り手があるだらうと思う。

乙骨先生の御命日は九月の十九日で、毎年秋の深まると共に先生への思慕も深くなつて行く。乙骨先生は日本の學者に多く見られる文獻學者的な傾向の方だつたから、そこに先生のお仕事の限界があつたことは事實である。しかし、その限界の中でも先生をして光らせていたのは、「良心的」そのものと言えるような眞摯な研究態度とまれに見る深い知識とであつた。かつ、ヨリ重要なことはそれらのものが、すべて先生の音樂に対する殉教的な愛情から發していたと言うことだ。とにかく先生は音樂が好きで好きでたまらない、と言ふ人で、他に私心と言うものが無かつたのである。そして、惜しくも未完成に終つた音樂通史の草案は先生の貴い生命によつてあがなわれる結果となつたのであつた。この純粹さが僕を先生へとひきつける。

先生の二人の高弟のうち、先生亡き後、後任として教授になつた太田太郎氏は戦時に病没し、高橋均氏は音樂の世界を去り、音樂史を專攻する直系の後繼者が絶えたことは淋しい。

故人の話ばかりで、少しそめつぽくなつたから、おめでたい消息で稿を結ばせて頂く。

守衛の神崎老はわざか一年か二年の年數不足で永年勤續者の表彰からもれたが、まだまだ若いのだから、次回のこのよだな機會には

必ず參列して貰えるだらうから安心である。

今回表彰の榮を擔われた信時、萩原、眞篠、長坂、その他諸先生は揃つて、全くお元氣で、失禮ながら年齢などはまるで感じさせないお若さである。

圖書の小林安八氏も壯健なもので圖書の返却ぶりが悪いと言うので、先生も生徒も區別なしに叱られているのは壯觀である。

(『同聲會報』第二六八号 昭和二十四年二月 二一～二二頁)